

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370337

研究課題名(和文) トニ・モリスンと多文化時代の越境するアメリカ文学・文化

研究課題名(英文) Toni Morrison and her Influence on American Literature and Culture in the Age of Multiculturalism

研究代表者

森 あおい (MORI, Aoi)

明治学院大学・国際学部・教授

研究者番号：50299286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アフリカ系アメリカ人女性として初めてノーベル文学賞を受賞したトニ・モリスンを取り上げ、彼女が描くマイノリティとして周縁化されてきたアフリカ系アメリカ人、特に女性のメディアにおける表象と、彼女たちが権威主義に対抗する手法を考察した。さらに、モリスンが現代の多文化時代の文学、文化に与えた影響を考察し、その作品を源泉として、人種、ジェンダー、階級、自然の関係に見られる巧妙に隠された権力構造と闘う手法を明らかにし、他者排除を前提とする均質的な価値観に対抗する多様性を尊重し、他者との共生をめざす文化研究を展開した。

研究成果の概要(英文)：In this research project, the Nobel laureate African-American novelist Toni Morrison's work has been examined with the emphasis on the representations of African Americans and women in media. Conducting this research, her strategies to defy the authoritative power structures were clarified. Morrison skilfully revealed the manipulating process by which power structures are shrewdly constructed to obscure and silence those who are placed in the margins of society. Her influences on the modern literature and culture in the age of multiculturalism was evident. This research project proved the importance of creating a space which respects diversity, by challenging the monolithic values of the mainstream society and fostering the coexistence of different entities.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 トニ・モリスン 人種

1. 研究開始当初の背景

トニ・モリスンの先行研究に関して概観すると、特にノーベル賞受賞後、夥しい数の論文、研究書が出版され、また *Cultural Critique* や *Modern Fiction Studies* などの学術雑誌でも何度も特集が組まれてきた。Trudier Harris は *Fiction and Folklore* (1991)においてモリスンの作品におけるアフリカ系アメリカ人の民間伝承の役割を指摘しており、また報告者も *Toni Morrison and Womanist Discourse* (1999)においてアリス・ウォーカーが提唱した女性のネットワークを表わす概念である「ウーマニスト」を基にモリスンの作品を論じている。さらに、Valerie Smith が *Writing the Moral Imagination* (2012)を著わし、モリスンの作品の背景にあるアフリカ系アメリカ人の歴史を紐解いている。これらの研究は、アフリカ系アメリカ人の文化や歴史に対する考察を深める上で著しい成果を挙げてはいるが、アフリカ系アメリカ人文学・文化の枠を超えた学際的な議論を呈示するには至っていない。

報告者は、先行研究を検証する過程において、これまで抑圧されてきた人種、セクシュアル・マイノリティ、階級、環境の問題を包括的に見直す必要を感じ、他者排除を前提とする均質的な価値観に対抗する文化研究の必要性を再認識し、「トニ・モリソンと多文化時代の越境するアメリカ文学・文化」というテーマの研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究では、以下の3点について明らかにすることを目的とした。

(1) 周縁化されたアフリカ系アメリカ人の歴史

最初に、報告者の研究成果である単著、『トニ・モリソン 「パラダイス」を読む』(彩流社 2009)で用いた、アフリカ系アメリカ人の歴史と物語の時代背景を照らし合わせる手法をもとに、『パラダイス』以降に出版された三部作、『ラヴ』(2003)、『マーシィ』(2008)、『ホーム』(2012)に描かれているアメリカ史を読み直し、アフリカ系アメリカ人にまつわる人種問題を明らかにする。特に、1990年代以降、リチャード・ダイアー等によって盛んになってきた「ホワイトネス(白人性)研究」の視点を取り入れ、歴史学、社会学、民俗学、文化研究を横断する学際的な立場から、白人優位の価値観と差別の構造に注目してモリスンの作品分析を行う。

(2) アメリカン・ルネサンスにおける白人中心のキャンノンにおけるアフリカ系アメリカ人の存在

次に、昨今活発になってきている、19世紀アメリカ文学の全盛期の中核となったアメ

リカン・ルネサンスの多文化的な議論を視野に入れて、トニ・モリスンの文学批評『白さと想像力』(1992)を読み直し、白人中心のキャンノンの見直しを行う。モリソンはこの評論において19世紀のアメリカン・ルネサンスを代表するエドガー・アラン・ポー、マーク・トウェイン、ハーマン・メルヴィルやナサニエル・ホーソン等の作品を再検討し、白人によって書かれたテキストにおいて、アフリカ系アメリカ人が一見するとその存在が不可視とされながらも、実はそれらの作品に非常に大きな想像力を与えたと指摘している。モリソンが言及しているメルヴィルやホーソンの作品を再読し、これまでの白人中心的な読みでは表面化されてこなかったアフリカ系アメリカ人のアメリカン・ルネサンスへの貢献を明らかにすることを目的とする。

(3) 越境するマイノリティ表象とヴィジュアル・アートの可能性

モリソンは、2006年11月6日から26日にかけて、フランスのパリにあるルーヴル美術館で「外国人の家」(“Foreigner’s Home”)という特別プログラムを企画した。この企画では、文学に加えて、絵画や写真、映画や音楽、舞踊といったさまざまなヴィジュアル・アートを通して、ルーヴル美術館に所蔵されている古今東西の芸術の再評価が行なわれ、地域、時代を超えたマイノリティ表象の研究の場が提供された。この企画のようにモリスンの文学を超えた文化発信は、ポスト・ソウル世代と呼ばれる、公民権運動以降に生まれた若い世代の芸術家や作家にも大きな影響を与えていると考えられる。本研究では、彼(女)たちが発信するヴィジュアル・アートの可能性についても明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究方法の詳細は、以下の通りである。

(1) 平成26年度：周縁化されたアフリカ系アメリカ人の歴史に関する研究

モリスンの後期三部作と呼ばれる『ラヴ』(2003)、『マーシィ』(2008)、『ホーム』(2012)を詳しく分析し、白人中心の歴史では抹消されてきたアフリカ系アメリカ人の歴史を読み解く。具体的には、『ラヴ』においては、Valerie Smith が *Writing the Moral Imagination* (2012)で指摘している、アフリカ系アメリカ人のコミュニティ衰退の原因について考察する。特に、これまでほとんど議論されてこなかった公民権運動や、それ以前のハウジング・プロジェクトの推進と、アフリカ系アメリカ人のアイデンティティ喪失の問題を調査し、ホワイトネス優位の社会、歴史によって周縁化された人々の存在を明らかにする。『マーシィ』では、モリソンが強く影響を受けたとされる William Cronon の *Changes in the Land Indians:*

Colonists, and the Ecology of New England (2003)を基に、彼女が指摘する人間による自然搾取と人種主義の関連というテーマの根拠を明らかにする。『ホーム』では、作品の背景に描かれている朝鮮戦争に従軍したアフリカ系アメリカ人が帰国後に直面した人種差別と、その当時、アフリカ系アメリカ人女性などのマイノリティの女性に対して行なわれていた優生学の実験について、Charles M. Busseyの *Firefight at Yechon: Courage and Racism in the Korean War* (2002)や Randall Hansenの *Sterilized by the State: Eugenics, Race, and the Population Scare in Twentieth-Century North America* (2013)を中心に検証し、ホワイトネス優位のアメリカ社会の枠組みの中で、マイノリティの人々が政治的にも搾取されていたことを究明する。

(2) 平成 27 年度：アメリカン・ルネサンスにおける白人中心のキャンノンにおけるアフリカ系アメリカ人の存在に関する研究

モリスンの『白さと想像力』(1992)を基に、白人作家のテキストで遠景化されたアフリカ系アメリカ人の存在を読み解くためのテキスト研究を行う。まずは、モリスンがこの批評の中で論じているアメリカン・ルネサンスを代表するホーソンやメルヴィルの作品を再検討する。そして、大串尚代著の『ハイブリッド・ロマンス—アメリカ文学にみる捕囚と混淆の伝統』(2002)や西谷拓哉、成田雅彦編の『アメリカン・ルネサンス - 批評の新生』(2013)等で取り上げられている、アフリカ系アメリカ人やアメリカ先住民、また、女性といった多文化主義的な視点から論じられている研究論文の分析を行う。夏休みには、ワシントン D.C.の米国議会図書館やニューヨークのショーンバーグ黒人文化センターのアーカイヴで、アフリカ系アメリカ人の歴史に関する、日本で入手困難な資料を収集する。さらに、ニューヨークでは *Miscegenation: Making Race in America* (U of Pennsylvania, 2008)や *Black Walden: Slavery and Its Aftermath in Concord, Massachusetts* (U of Pennsylvania, 2009)の著者で、アメリカ文化史における人種言説について研究を行なっているニューヨーク州立大学パーチェス校のエリーゼ・レミール准教授と面談し、モリスンの視点から読み解くアメリカン・ルネサンスと白人中心のキャンノンの見直しの関係について意見交換を行う。

(3) 平成 28 年度：越境するマイノリティ表象とヴィジュアル・アートの可能性に関する研究

2006年にルーヴル美術館で実施された、モリスンの「外国人の家」(“Foreigner’s Home”)の企画に関する文献収集、分析を行う。さらに、2011年に上演されたモリスンの戯曲

でシェイクスピアの『オセロ』(*Othello*) (1602)の翻案と言われている、『デズデモナ』(*Desdemona*)に関する研究を行ない、モリスンが文学を越えた舞台上で視覚的に訴える異文化の混淆というテーマについて考察する。また、モリスンのヴィジュアル・アートについての考察を基に、昨今のメディアのテクノロジーの発達によって国境などのボーダーをたやすく越えて発信できるヴィジュアル・アートに関する研究を行う。特に、公民権運動以降に台頭してきたポスト・ソウル世代と呼ばれる若い世代の作家、芸術家、映画監督たちの文化表象に着目する。具体的には、*African American Review* (2007)で特集されたポスト・ソウル美学の論考を中心に分析を行い、人種の枠を超えた新しい世代が発信する文化の可能性について研究を進める。さらには、ポスト・ソウル研究をもとに、単一文化を見直し、多様性を尊重する越境するアメリカ文学・文化表象を解明する。

最終年度は、総括として、所属する国内外の学会(アメリカ文学会、アメリカ学会、黒人研究会、多民族研究学会、日本英文学会、Modern Language Association、Toni Morrison Society等)での研究発表をめざし、準備を進める。最終的には、学会誌等に論文を投稿し、研究成果の公表に努める。

4. 研究成果

平成 26 年度は、周縁化されたアフリカ系アメリカ人の歴史に関する研究を「ホワイトネス」の視点から行った。特に、モリスンの『青い目がほしい』(1970)、『マーシィ』(2008)、『ジャズ』(1992)、『デズデモナ』(2012)を再読し、白人中心の歴史では抹消されてきたアフリカ系アメリカ人の歴史を読み解いた。特に、ホワイトネス優位のアメリカ社会の枠組みの中で、マイノリティの人々が政治的にも搾取されていたことを究明した。

平成 26 年 5 月には、北海道大学で開催された日本英文学会第 86 回大会のシンポジウムでモリスンに関する発表を行い、モリスンが試みるアフリカ系アメリカ人の歴史回復の手法について他の研究者との意見交換を行った。さらに、6 月にはリーハイ大学(アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州)ジェームズ・ブラクストン・ピーターソン (James Braxton Peterson) 准教授を日本に招聘し、研究に関する助言を受けた。また、同准教授に黒人研究会第 60 回大会の基調講演を依頼し、日本の研究者も交えてアフリカ系アメリカ人の文化・文学研究に関する意見交換の場を設けた。ピーターソン准教授は、アフリカ系アメリカ人の伝統的文学・文化研究にヒップホップ文化を取り入れていることで知られている。ピーターソン准教授との国際情報交換は、今後のモリスン研究の可能性を違った視座から行う可能性を示唆してくれた。

(ピーターソン准教授の招聘は、当該年度に予定していた海外協力研究者キャロリン・デナード教授が来日できなくなったため、同教授の推薦によって実現した。)

平成 27 年度は、19 世紀アメリカ文学の全盛期の中核となったアメリカン・ルネサンスの多文化的な解釈を視野に入れて、トニ・モリスンの文学批評『白さと想像力』を読み直し、白人中心のキャンノンの見直しを行った。その成果として、研究論文、「闇が語るもの - トニ・モリスンの『白さと想像力』と『ジャズ』を中心に -」を執筆した。

平成 27 年 5 月 22 日には、ボストンで開催された第 26 回アメリカ学会 (American Literature Association) の年次大会で、"Reexamining Representation of Whiteness in Toni Morrison's *Desdemona*" という演題で、トニ・モリスンに関するパネルで研究発表を行い、質疑応答ではモリスンの研究者との貴重な意見交換の時間を持つことができた。

平成 27 年 10 月には、カリフォルニア大学ロサンゼルス校で上演されたモリスンの戯曲『デズデモーナ』を観劇した。実際にモリスンの作品を舞台で見ることで、モリスンの試みる活字を越えたマルチメディアの可能性を目の当たりにした。

また、当該年度は、ヴァレリー・スミス (Valerie Smith) 著のトニ・モリスンに関する研究書、『トニ・モリスン 創造と寓意の文学』 (*Toni Morrison: Writing the Moral Imagination*) の翻訳 (共著) を完成させた。翻訳にあたって、訳注を付ける作業では、他の論文のリサーチを行う必要があったが、他の研究者の論文を読み進める中で、モリスンの作品の多様な解釈の可能性がより明確になった。

平成 28 年度は、「越境するマイノリティ表象とヴィジュアル・アートの可能性」をテーマとして研究を行った。特に、2011 年に上演されたモリスンの戯曲でシェイクスピアの『オセロ』(1602) の翻案と言われている、『デズデモーナ』に関する研究を行い、モリスンが文学を越えた舞台上で視覚的に訴えるテーマについて研究を行った。

平成 28 年 6 月 18 日には、中京大学名古屋キャンパスで開催された日本アメリカ文学会中部支部の例会で、「越境するトニ・モリスンの『デズデモーナ』」という演題で、研究発表を行い、質疑応答ではモリスンの研究者との貴重な意見交換の時間を持つことができた。この研究発表をもとに修正を施した論文「トニ・モリスンの『デズデモーナ』を通して考える人種言説」(『明治学院大学国際学研究』5号、平成 29 年 3 月、151-162 頁) を執筆した。

さらに、平成 26 年 5 月に開催された日本

英文学会のシンポジウムで発表した論文「アメリカン・ロマンスとトニ・モリスン - 『白さと想像力』と『ジャズ』を中心に -」をもとに、執筆した論文「「闇」が語るもの - 『白さと想像力』と『ジャズ』を中心に -」が『新たなトニ・モリスン - その小説世界を拓く』 (金星堂、2017 年 3 月) に収録された。本書は、トニ・モリスンの現時点での全作品を扱った日本で初めての研究書であり、風呂本惇子氏、松本昇氏、鶴殿えりか氏とともに編集委員会のメンバーとして編集の作業に当たった。編集委員として他の研究者の論文にも触れる中で、モリスンの多文化時代の越境するアメリカ文学・文化の側面をさらに明らかにした。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計 2 件)

森 あおい、「トニ・モリスンの作品を通してみるホワイトネス表象の見直し」『多民族研究』7号 2014.3. 86-99 頁.

森 あおい、「トニ・モリスンの『デズデモーナ』を通して考える人種言説」『国際学研究』第 50 号 2017.3. 151-62 頁.

(学会発表)(計 3 件)

森 あおい、「アメリカン・ロマンスとトニ・モリスン 『白さと想像力』と『ジャズ』を中心に」日本英文学会第 86 回全国大会シンポジウム 2014.5.25 於北海道大学.

Mori, Aoi, "Reexamining Representation of Whiteness in Toni Morrison's *Desdemona*." 第 26 回アメリカ文学会 (American Literature Association) 2015.5.22. 於アメリカ合衆国ボストン.

森 あおい、「越境するトニ・モリスンの『デズデモーナ』」日本アメリカ文学会中部支部 6 月例会 6.18. 於中京大学名古屋キャンパスセンタービル.

(図書)(計 2 件)

Mori, Aoi, "Rethinking Race Matters." *Living Language Living Memory: Essays on the Works of Toni Morrison*. Kerstin W Shands and Giulia Grillo Mikrut, eds. Stockholm: Södertörns högskola. 2014.7. 127-38 頁

森 あおい、「「闇」が語るもの - 『白さと想像力』と『ジャズ』を中心に - 『新たなトニ・モリスン - その小説世界を拓く』 金星堂 2017. 111-28 頁

森 あおい (共訳、共編著) 『トニ・モリスン 寓意と想像の文学』 彩流社 2015. 218 頁.

6. 研究組織

(1) 研究代表者 森 あおい (MORI, Aoi)

明治学院大学・国際学部国際学科・教授

研究者番号：50299286

